

飛ぶ教室

児童文学の冒険

21

SPRING 2010



とじこみ絵本

「おくさまの部屋」

エリナー・ファージョン 作

石井桃子 訳

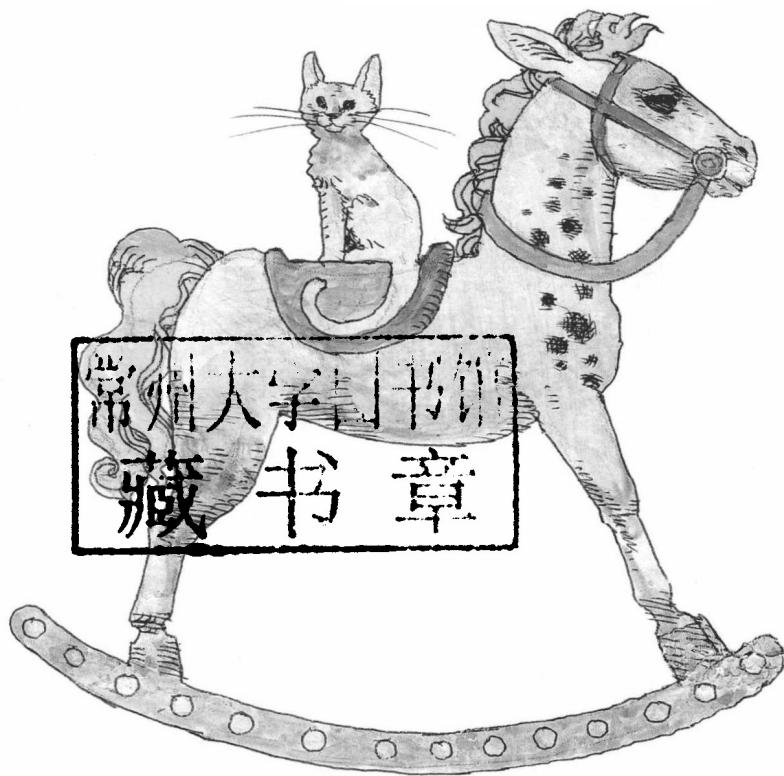
宇野亜喜良 絵

ファージョン
《本の小部屋》の豊かな世界



飛ぶ教室

児童文学の冒険



21

SPRING 2010

4
フアージョン

《本の小部屋》の

豊かな世界

フアージョンの小部屋

40 ◆ 未邦訳詩

「じっと、じいっと」

「ぴかぴかの馬車」

アーサー・ビナード & 木坂涼 訳

44 ◆ 未邦訳童話

「スキップおばさん」

遠藤育枝 訳

55 ◆ 未邦訳エッセイ

「魔法の窓」

古屋美登里 訳

65 ◆ とじこみ絵本

「おくさまの部屋」

石井桃子 訳

宇野亜喜良 絵

鼎談

8 今江祥智×石井睦美×野中柊

「フアージョンは幸福で楽しい」

作家論・作品論

15 「おらかなフアージョンの宇宙」

白井澄子

20 「現状に踏みとどまる登場人物たち」

柏葉幸子

34 「ヴィクトリア朝の子ども部屋

——子ども文化のふるさと」

川端有子

エッセイ

「わたしの好きなフアージョン」

神沢利子

高田桂子

岡田淳

こみねゆら

62 フアージョン 全ブックガイド

童話

八束澄子

「いっぽん道」

連載

蜂飼耳

106 クリーニングのももやまです③

ひこ・田中

114 ロールイチゴ③

東直子

87 「つるのくにか見えるよ」

長崎訓子

136 偏愛映画コラム 子どもたちによろしく⑤

神宮輝夫

142 神宮版戦後日本児童文学史⑧

大久保雨咲

98 「となりのひと」

マンガ

長谷川義史

138 さんぱつやきょうこさん②

詩

内田麟太郎

96 「じわじわ」

BOOKS

155 148 第10回作品募集結果発表

131 129 絵本 松田素子

135 133 児童書 安藤由希

YA 宇野常寛

大人の本 幅允孝

126 エッセイ

「わたしの一冊」

福岡伸一

「星の王子さま」

小澤征良

158 156 Column-Column

執筆者紹介

フ
ア
ー
ジ
ヨ
ン

《本の小部屋》の豊かな世界

THE LITTLE BOOKROOM

By Eleanor
Farjeon



rd) Illustrated by Edward Ardizzone



たぐさんの本に囲まれたこの小さな部屋で、
エリナー・ファージョンは育ちました。
本はエリナーを、居ながらにして
あらゆる世界へと連れていき、やがて、
その恵みを蓄えた彼女は、物語を書き始めました。
幸福で楽しい多くの作品を生み出した作家、
ファージョンの特集です。

多様な ファージョンの世界

詩情豊かな物語世界で日本の読者を

魅了しつづけてきたファージョン。

文庫で、全集で、絵本で、親しまれてきました。

(くわしい紹介は62ページから)

読み
聞かせに
どうぞ



日本ではじめて紹介されたのが、この文庫。初版 1959 年。

『ムギと王さま』『天国を出ていく』（新版）

石井桃子訳／岩波少年文庫／2001 年



読み
つがれる
定番

ファージョンの多彩な世界を楽しむなら、この作品集。

『ファージョン作品集』（全7巻）

石井桃子訳／岩波書店／1970～1986 年



数あるファージョン童話の中でも、人気の高い1編。
『エルシー・ビドック、ゆめでなわとびをする』
石井桃子訳／シャーロット・ヴォーク絵／岩波書店／2004年

大型絵本で
楽しむ



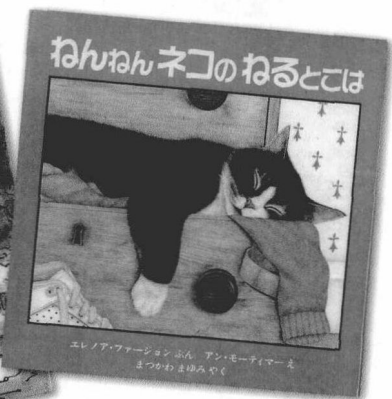
船乗りジムが語る冒険物語。
石井訳とはまた違う世界へ。
『町かどのジム』
松岡享子訳／学研／1965年

ひとあじ違った
魅力を

作者の
素顔を
せまるに



たくいまれな想像力の源に
触れたい方は、こちらをどうぞ。
『ファージョン自伝』
中野節子監訳／
広岡弓子&原山美樹子訳／
西村書店／2000年



本国イギリスでは、詩が絵本のかたちで
今も親しまれている。
『マローンおばさん』
阿部公子&茨木啓子訳／
アーディゾーニ絵／こくま社／1997年
『ねんねんネコのねるところは』
まつかわまゆみ訳／
アン・モーティマー絵／評論社／1998年

詩から
うまれた
絵本



鼎談

野中
柊

今江
祥智

石井
睦美

ファージョンは
幸福で楽しい

写真
長岡博史

ファージョンとの出会い

石井 わたしがファージョンを読んだのは大人になってからで、そのきっかけは今江先生だったんです。

今江 わたし、そんな立派なことをしましたか(笑)。

石井 はい(笑)。

野中 どんなきっかけだったの?

石井 編集者だったころ、今江先生のところへ出入りするようになって、先生があの本はおもしろい、この本はおもしろいと作家や作品をいろいろと教えてくださいましたんです。

野中 そのお話の中に出てきた一人の作家がファージョン……。

石井 ええ、そう。

今江 だとしたら、わたしは、ほんまに偉い人やね(笑)。

野中 先生が初めてファージョンをお読みになったのはいつごろですか?

今江 ぼくが童話を書くようになったそのいちばん最初のところにファージョンがあったんですよ。正確に言えば、名古屋の中学校で英語教師をして

た時期やね。

石井 ということは、童話をお書きになる前ですね。

今江 そう。当時の中学校には、新任教員が十一人あって、ぼくだけ担任がなかったんです。担任がなかったら暇でっしやる。それを校長先生に言うたらね、「今江先生、図書館というものがあるが、本がない。本をそろえてくれませんか」と頼まれてね。それで図書館へ見に行ったらね、十五冊くらいしかなかったんです。そのうち五冊が岩波の少年文庫だった。

野中 その中の一冊がファージョンだったんですね。

今江 そう。『ムギと王さま』。それが最初の出会いだったんです。

野中 いかがでしたか? 最初に読んだときの感想は……。

今江 とてもおもしろかった。ほかにもケストナーの『エーミールと探偵たち』があって、それもまたおもしろかったけど、ファージョンにはほんとにびびくりした。最初に入ってる「ムギと王さま」なんかは神話に近いです

よね、一種の。

石井 そう。ほかに妖精譚みたいな作品が入ってますけど、どれも創作なんですよね。

今江 そう。れっきとした創作。当時、読んだ後で調べたんですよ(笑)。

石井 わたしも最初に読んだのは『ムギと王さま』なんですけど、読み終えたときに、どれも知らないお話なんだけど、すごく懐かしい感じがしたの。

野中 わたしもそうだった。なんでだったんでしょうかね?

石井 よくはわからなかったけど、子ども時代に読んだことのある世界がそこにあったような、そんな感じがしたんです。

今江 子ども時代にどんなのを読んだの?

石井 それが記憶にはっきりと残っていないんだけど……。わたしが自分の意思で「物語」を読んだという記憶をはっきりともっているのは、小学館版の「世界名作文学全集」なんです。

「ギリシャ神話」をはじめ、「古事記」とか、それこそかつての名作といわれ

たものがいっぱい入っていて、それが意識的に本を読んだスタートなんです。「ムギと王さま」の冒頭に、「作者まえがき」というファージョンの言葉があるじゃないですか。「本の小部屋」が出てくる……。

野中 そうそう。わたしもあれ大好き。
石井 あそこに書かれていることって、ちょうど自分が子どもだったころの、本を読むときの体験と重なるっていうか、そういう感じがすごくしたんです。

野中 わかります。わたしがファージョンを初めて読んだのは、たぶん十五、六のころだったんですけど、『ムギと王さま』を読んで『リンゴ畑のマーティン・ピピン』にきて、これは読み終えたのかどうかっていうのを、はつきりと覚えてなかったんだけど、今回読み直してみても、おそらくこれは最後まで読まなかったんだと思うの。
今江 子どもには読めないよ、これは。
野中 でもね、『ムギと王さま』だけは、一つ一つは覚えていないんだけど、読んだなということ、しかもすごくわくわくしながら読んだんだということ

は覚えているの。「十円ぶん」なんかも、とてもおもしろく読みましたね。

今江 そう、「十円ぶん」ね、あれもびっくりした。あんなのは子どももの日常茶飯事でしょう。最後に「がちゃん」とそこがすごくうまいよね。とにかく、ぼくはファージョンを読んだとき、「あ、これが童話」と思ったんです。

ファージョンは幸福で楽しい

今江 ぼくは、大阪の商人の息子だったんですけども、おやじが本好きだったんですね。やっぱり本を読まなにかんっちゃううんで、絵本もたくさん買ってきて、気がつくといろんな、いわゆる読み物があつたんですよね。で、ぼくはそれを手当たり次第に読んでたんだけど、児童文学というのは、センチメンタルなものが多いんですよ。その点、ファージョンというのは、割とドライだね。
石井 アンデルセンなんか悲劇的なものが多いですよ、結末も。ファージョンは、その点まるっきり逆ですよ



ね。

今江 ファージョンはめでたいよね。

石井 本当にもう幸福で楽しい。

野中 ほんと幸福ですよ。

今江 非常に幸福だよ。物語というのは、子どもが読んでおもしろくて夢中になって、読み終わったときに一種の安心感がなければ、やっぱりちょっと

困るっていう感じがぼくはどこかあってね。不安にして突き放すっていう型も、一つは子どもの付き合い方にあるんですけど、ファージョンに、それはないよね。

野中 なんかファージョンって、やっぱり子ども時代の幸福な記憶をもって人だと思うんです。たしかにある意味でもとても特権的な育ち方だと思いますし、そのことについて大人になってから悩んだりしたんじゃないかとも思うんですが、どこかの段階で、いやこれでいいのだ、子どもに向かって幸福な子ども時代について語ればいいのだから、自分を肯定したんじゃないかなって、……これは本当にわたしの想像ですけど。でも、幸福な子ども時代といっても、どの子も、どんなに愛されてもものすごく不安だったり、孤独だったりして過ごしてると思うんです。だから夜眠る前、眠りの世界で一人ぼっちになっちゃうその前に幸福なお話を、っていう、何かそういうものを感じるの。

石井 そうですね。だって、作品の中

には本当に幸福なものだけが集まっているわけではなくて、やっぱり孤独とか、理不尽な思いとか、そういうものもいっぱい入ってるわけじゃないですか。
野中 そうですよ。そういうことがけっこう積極的に描かれているにもかかわらず、ダメージを受けずに、何か幸せな気持ちでお話を読み終えることができるっていう……。

石井 そうね。

野中 『ガラスのくつ』で、エラが舞踏会から帰ってきてから、あれは夢だったんじゃないかってすごく不安になって、お父さんに舞踏会の話聞いて、ああ夢じゃなかったんだわって確認するところがあるでしょ。そして、とにかくその幸せな記憶を心の支えにして、またお母さんやお姉さんにいじめられる辛い日々をなんとか過ごそうとする。あのくだりを読んだとき、ファージョンが童話を書くモチベーションって、幸福な子ども時代の記憶——それはお父さんお母さんに愛されたとか、友達と遊んだとか、楽しいお話を聞いたとか、そういうった思い出

大人になってからいろんなことを乗り越えるときのよすがになると信じていた、だからこそ童話を書き続けたのかなあって思ったんです。

石井 あと、なんていうのかな、まだ世間とか世の中とかっていろいろの知らない女の子がこの物語を読んだとき、本当にわくわくできる、きらきらした





世界がそこにある。エラからすると、それはお母さんにいじめられている日常の対極にある世界で、それは家にいるときの彼女にとっては幻想というか想像の世界にすぎないんだけど、でもそこに行けば確かにその世界はあるっていう……。ちょっとうまく言えないんだけど……。

野中 わかる気がする……。

石井 その想像の世界の確かさみたいなものを、ファージョンをもってた人なんじゃないかなって思いますね。

その時代時代の童話がある

今江 「十円ぶん」なんかもそうですけど、ファージョン読んできると、この人すごいリアリストやな、って思うところがある。

野中 分かります。わたしね、あの「サン・フェアリー・アン」を読んだときにそう思ったの。

今江 これはすごくいいでしょう。

野中 はい。すごく好きです。

石井 何世代にもわたったお人形がま

た見知らぬ国の女の子の手に渡って、それがまたっていうね。

野中 いかにも作ったお話っていう感じもするけれど、でも、わたしあれってすごく現実に近いと思って。現実の世界って本当に不思議な偶然が起こるじゃないですか。まさしく「事実の小説よりも奇なり」って感じで。十年も二十年もたって、そこまでいくともう因果の問題じゃないかっていうような偶然が起こる。この作品にはそれがとてもよく現れると思うんです。ポール・オースターの作品を思い出しました。彼もこういうリアリティを描くでしょう？ あの『トゥルー・ストーリー』っていうエッセイ集……。

石井 うんうん、わかります。

野中 だから、ファージョンが書いたものって、ファンタジーって解釈されているけれども、ものすごくリアルだとも思うのね。

今江 ぼくは、ファージョンで童話の世界に入るでしょう。ケストナーの世界にも入って、その二つに両足かけて歩いていってるときに出会って、

「えっ」と思ったのが、ローベルだった。あの人の絵本を読んだとき、「これは現代やないか」ってびっくりしたわ。ガマとカエルで、ここまで現代をきちんと語れるかと思ってね。あれは、寓話でもないし、童話でもないし、フェアリーでもないし、大変現実的なお話なんです。会話編というか、対話編みたいな感じ。

石井 ファージョンは全然違いますよね。確かに現代っていう感じはしないなと思う。

今江 ファージョンは違うね。やっぱりお話の時代の最後の輝きみたいなもの、とっていいんじゃないかな。一時代前の、非常に豊かな童話の土壌に放たれた作品群というか……。

石井 はい、それはすごい感じます。

今江 アンデルセンの伝統を継いでるしね。とはいえ、アンデルセンとファージョンは違う。その時代時代の童話ってあるんだな思いますね。

石井 そうですね。それに、今になって思うことなんだけど、ファージョンって、輪郭を作るのがすごい上手な

人って感じがするんですね。たとえば『年とったばあやのお話かご』だったら、靴下の穴の大きさとか繕う時間によって、お話が伸びたり縮んだりする。『イタリアののぞきめがね』もそうですし、そういう輪郭を作って、その中に読み手を放り込んでしまうのがすごく上手。だから、読み手は大人でも子



どもでも、自由にその世界に自分の気持ちをもっていけるんじゃないでしょうかね。

野中 それから、わたし、ファージョンって、たくさんの神話とか昔話とかいろんなものに影響を受けたっていうよりも、それらをどんどん自分の体を通して、また新しく物語を紡ぎ出しているような気がするんですね。だから、読んでみると、人のずつとずつと深いところに沈んでる、生まれる前の記憶みたいなものが引き出されてくるのかもしれないなって。

石井 だからかしらね。なんだか懐かしい感じがするのは……。

今江 ファージョンの自伝は読みました？ この人、あの時代にしたらすごく果敢でね、恋したり失恋したり、結構波乱万丈なんですよね。

石井 それだけいろいろあって、でも書くものはあくまで童話中心だったっていうのがおもしろいですね。『リンゴ畑のマーティン・ピピン』だって小説ではないし、明らかに童話で、その中で、愛とか憎しみとか嫉妬とか、そ

ういうのを全部書こうとしてる。

今江 ちゃんと書いてる。そういう点やっぱりね、アンデルセン読んだ後でファージョン読むと、あ、時代が一つ新しいっていうのが非常によくわかるんです。その後にローベル読むとまた違うなと思いますしね。その時代時代の童話と童話作家って、やっぱりおるんやな。ファージョンはそれを知ってた上で、自分の生きた時代、それが反映した自分の物語をすごく大事にしはったんやろうと思うけどな。

石井 やっぱりそういう使命感みたいなものもおもちだったんでしょかね。

今江 それははっきりしていると思いますね。それにしても、この『ムギと王さま』は、ファージョンが八十歳くらいになって、選って選って作ったやつやろ。

石井 七十四歳のときですね。

今江 ぼくも、あと二年もしたらこんな作ろうかな。ふふ……。

野中 すてき。楽しみにしています。

(2・23 光村図書本社にて)



石井 睦美 (いしい・むつみ)
作家。57年神奈川県生まれ。出版社勤務を経て執筆活動に入る。『五月のはじめ、日曜日の朝』『キャベツ』など著書多数。駒井れんの名前でも活躍中。

今江 祥智 (いまえ・よしとも)
童話作家。32年大阪府生まれ。創作、翻訳、評論、講演とさまざまな活動を通して、子どもの本の世界を広げてきた。『今江祥智の本』(全36巻)、『ひげがあろうが なかろうが』など。

野中 将 (のなか・ひいらぎ)
作家。64年新潟県生まれ。小説『プリズム』『その向こう側』、童話〈パンダのボンボン〉シリーズなど著書多数。



エリナー・ファージョン
Eleanor Farjeon (1881-1965)

イギリスの児童文学作家、詩人。「イギリスのアンデルセン」と称される。小説家を父にもち、父親の膨大な本が積み上げられた《本の小部屋》で物語に親しみ、5歳ごろから物語や詩を書きはじめる。1921年、『リンゴ畑のマーティン・ビビン』で作家としての位置を確立。以後、短編、長編、詩、戯曲と幅広いジャンルで作品を発表する。1955年に出版された自選短編集『ムギと王さま』で、カーネギー賞と第1回国際アンデルセン賞を受賞。

作家論

おおらかなファージョンの宇宙

白井澄子

「本の小部屋」から生まれた作家

二十世紀前半の英米で人気を博し、日本では石井桃子訳で紹介されて以来、多くのファンを魅了してきたファージョン。その作品はストーリーテリングなどで語られることも多く、「ムギと王さま」や「エルシー・ピドック夢で繩とびをする」など、ユーモアあり人生への深い洞察ありの作品はどれも忘れがたいものです。

ファージョンの紡ぎ出す物語は、彼女が育った豊かな文学的環境と無縁ではありません。ファージョンが生まれたのは一八八一年。当時、流行作家として名を馳せた父と、女優の娘である母との間にできた二番目の子どもでした。

父親は子どもの情操教育に熱心で、読書や物語作りを奨励し、音楽や絵を習わせ、よく芝居やオペラにも連れて行きました。後に、兄は音楽家、ファージョンは作家、二人の弟も評論家や劇作家になるといふ、まさに芸術一家でした。家には読書家の父が集めた膨大な数の本があり、とりわけ、雑多な本が積み上げられたままの「本の小部屋」は、子ども時代のファージョンにとっては宝の小部屋で、ここに座って何時間も読みふけたといふます。また、「T.A.R.」という秘密めいた遊びにも没頭しました。これは兄と二人で何人もの登場人物を演じわけ、即興でせりふを語っていくごっこ遊びで、T.A.R.は彼女の想像力と即興的な創作力など、物語る力を育てる場となりました。

当時、多くの中上流階級の娘がそうであったように、

ファージョンも学校には通わず、自宅で家庭教師に習い、自由に感性を磨く日々を送りましたが、家族との世界が中心だったため芸術的には早熟でも、世間的にはおくてで内気な少女でした。しかし、二十二歳の時に転機が訪れました。父が急死したのです。彼女は作家としてひとりだちしなければと焦りましたが、自分のスタイルが見つからず、苦悩の日々が続きました。ようやく三十代になって、わらべ歌風の詩を出版。続いて出した『リングゴ畑のマーティン・ピピン』が注目を集めました。作家として自立すると、豊かな文学性とおおらかな人柄に魅了された人々が彼女を慕って集まるようになり、D・H・ロレンス、ウォルター・デ・ラ・メア、エドワード・トマスといった文学者とも交友を深めました。そんな中で、詩人のE・トマスとのつきあいは友情以上の感情を伴うほろ苦いものでしたが、まだ無名だった彼の詩才を見出した功績は特筆に値します。その後、文筆家のジョージ・アールというよき理解者兼パートナーを得て、彼女の想像力はさらに飛翔を続け、亡くなる直前まで豊かな文学の花を咲かせることになったのです。

想像力と創造力の羽ばたき

ファージョンの作品は、出版されたものだけでも百冊ほどになり、子どもの本以外に、詩集、大人向けの作品、兄弟と共作したオペレッタの脚本があります。しかし、彼女